The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「私たちのことば」を求めて : インド、ゴア社会における多言語状況の文化人類学的研究
Author(s)	松川, 恭子
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46608
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【15】

氏　　名	松川恭子（まつかわきょうこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　１９９６７　号
学位授与年月日	平成 18 年３月 24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	**「私たちのことば」を求めて－インド、ゴア社会における多言語状況の文化人類学的研究－**
論文審査委員	（主査） 教　授　中川　　敏 （副査） 教　授　小泉　潤二　　教　授　春日　直樹　　教　授　栗本　英世

論文内容の要旨

本研究は、インド西部のゴア社会における多言語状況の文化人類学的研究である。1985～87 年に起こった激しい運動の末、ゴアの現地語コーンクニー語（Konkani）は州公用語となった。しかし、ゴアの人々皆の「私たちのことば」として、コーンクニー語を「話し、書き、勉強できる」形に確立していくことが困難な現状がある。その原因として本研究は、「私たちのことば」意識を生み出すメカニズムと競合する、複数の言語イデオロギーの存在を指摘し、それぞれの言語イデオロギーを担う人々の位置づけを、ポルトガル植民地時代の歴史、ゴア社会に特有の社会構造との関連から明らかにしようとした。本論は、序論と第１～５章までの本論、そして結論から構成されている。

まず序論では、⑴民族意識の成立と読み書き言語、⑵多言語社会における公共圏の構築、という二つの問題領域における先行研究を検討し、本研究の理論的立場を明らかにした。

第１章では本研究の対象としてのゴア社会の概略を示した。まず、本論を理解する上での基本情報であるポルトガルによる征服（1510 年）から現代に至るゴア史の流れを提示した。次に調査村である M 村と調査対象であるコーンクニー語知識人について紹介した。

第２章～第４章は、ポルトガル語、マラーティ語、コーンクニー語を使用する人々の社会・文化的属性と言語実践の関係を記述することで、州公用語として「私たちのことば」を構築する上で競合する言語イデオロギーを生成する社会構造と制度について探ろうとした。

第２章では、植民地時代に土地に対する権利を通じてゴアの特権的階層を形作っていた集団（キリスト教徒のガウンカールとバトカール）とポルトガル語との関係を明らかにした。1961 年にポルトガルがゴアから去り、植民地的制度が解体した後もポルトガル語使用を通じて過去と繋がっていこうとする人々の姿を描き出した。

第３章は、ゴアのヒンドゥー教徒にとって「公的言語」として話しことばのコーンクニー語と区別されるマラーティ語を扱った。ゴアの中心部は「旧征服地」と呼ばれ、16 世紀半ばにはポルトガル支配が完了した地域である。当時の宣教師と植民地政府によるキリスト教への強制改宗の動きによって、ヒンドゥー教徒は「新征服地」と呼ばれる周辺地域へと逃れた。新征服地でマハーラーシュトラ地域のバラモンを含みこむ形で形成された社会関係が、20 世紀初めにヒンドゥー教徒の移住とともに旧征服地に移植されることになった。マラーティ語は、教育言語としても使用されているが、最も目立つ形で使われるのは寺院を中心とした宗教的領域においてである。

第４章は、ゴア社会の大半の人々にとって話しことばとして認識されているコーンクニー語を読み書きする際に二つの文字体系－デーヴァナーガリー文字とローマ字－があることを問題とした。この二つの文字使用によってコーンクニー語は、異なる観点と制度の下で固定化・顕在化される。デーヴァナーガリー文字を使用する場合には州公用語という民族の論理が、ローマ字を使用する場合には典礼の現地語化という教会の論理が働いていることを明らかにした。

第５章は、1985～1987 年に起こったコーンクニー語州公用語化運動における印刷メディア、特に新聞を舞台に運動家たちが、「『私たちのことば』はコーンクニー語である」という言説をゴア社会に拡大し、「コーンクニー語公共圏」を構築していく際にとった戦略を分析した。更に、ゴアのような多言語社会では新聞という書記メディアだけではなく、非書記メディアであるパフォーマンス（大衆劇・歌など）の役割が公共圏形成に重要な役割を果たしたことを指摘した。

結論では、以上の議論を踏まえ、ゴアにおけるコーンクニー語アイデンティティ形成のこれからの方向性について考えた。

論文審査の結果の要旨

本研究のテーマはアイデンティテイ、とりわけ言語を通してのアイデンティティの問題である。行政の単位である州を言語を基準に設置しているインドにおいて、言語は、とりわけ、イデオロギーの問題としても重要になってくる。申請者は、インドにおいて特殊な歴史をもつゴア州のさまざま言語イデオロギーを、歴史とフィールドワークの両面から見事に分析している。

焦点のあてられる言語は、16 世紀から 1961 年までゴアの宗主国であったポルトガルの言葉（ポルトガル語）、最終的にゴア州の言語と認められることとなったコンクニー語、隣のマハーラーシュートラ州の公用語であり、ゴア州でも多くの人がじっさいに使用しているマラーティ語、この三つの言語である。

序論で言語とアイデンティテイ・民族意識、多言語社会の公共圏に関する議論を概観した後、１章ではゴアの歴史とゴアの現在を、とりわけ言語に焦点をあてて、概観している。

２章と３章はポルトガル時代から現在にかけてのゴアの言語状況を、社会状況にてらして描写している。権威のある言葉は、ポルトガル植民地時代には、キリスト教徒の間ではポルトガル語、ヒンドゥー教徒の間ではマラーティ語であったことが示される。それは現在にまで影響を及ぼしていることが、フィールドワークのデータを通じて示されます。

４章と５章は、ポルトガル語、マラーティ語に比較して下位におかれてきたコーンクニー語がいかにして最終的にゴア州の公用語として認められたかの分析にあてられる。コーンクニー語を表記するふたつの書記体系、ローマ字とデーヴァーナーガリー文字がアイデンティティに密接に関連していることが指摘される。しかし、ゴアとしてのアイデンティティの構築においては、最終的に非書記メディアであるパーフォーマンス（演劇など）が果たす役割が大きくなったことが示される。

多言語状況における言語を通じたアイデンティティの構築の過程が、歴史とフィールドワークを通じて見事に分析された論文である。

本論文は博士（人間科学）の学位にふさわしいものと判定する。